

日英多義語の認知意味論的分析

—「イエ」と“house”—

皆 島 博*

(2013年9月30日 受付)

キーワード：多義語，多義性，意味拡張，認知意味論，日英対照言語学

1. はじめに

本論では、日本語の名詞「イエ（家）」と英語の名詞“house”を取り上げ、その多義構造および意味拡張のプロセスと動機づけについて、認知意味論の観点から分析を行う。日本語の「イエ」と英語の“house”は、それぞれ、次のような、少なくとも3つの異なった語義（＝多義語の個々の意味）で用いられる点で多義的であるといえる。

(1) a. <家屋>：

35年ローンを組んでイエを建てました。

b. <家族>：

うちのイエはみんな仲が悪いです。

c. <名家>：

吉原家は江戸時代に庄屋を代々務めたイエでした。

(2) a. <家屋>：

My house is up this street.

(私の家はこの道を行った所にあります)

b. <家族>：

Try not to wake the whole house when you come in!

(入る時に家のみんなを起こさないようにして下さい)

c. <名家>：

*福井大学教育地域科学部人間文化講座

Mary is from an ancient house.

（メアリは古くから続く家の出です）

認知意味論では、上のような日本語の「イエ」と英語“house”が提示するさまざまな語義が無秩序に派生してきたものではなく、基本義（＝プロトタイプの意味）を起点として、そこからなんらかの認知的原理や動機付けによって意味拡張を展開し、相互に関連のある意味と意味とのネットワーク、すなわち、放射状カテゴリーを構成するようになったと考える。本論の目的は、「イエ」と“house”に関して、次の4点について、認知意味論の立場から記述¹⁾を行い、それらを明らかにすることである。

- （3） a. 「イエ」と“house”の複数の語義（＝意味）の認定
- b. 「イエ」と“house”の基本義（＝プロトタイプの意味）の認定
- c. 「イエ」と“house”の意味拡張と動機付け（隠喩・換喩・提喩）の認定
- d. 「イエ」と“house”の多義構造にみられる類似点と相違点の指摘

2. 語の意味拡張と放射状カテゴリー

一般に、1つの語が2つ以上の意味を持つ場合、その語は多義的であるといい、複数の意味・語義をそなえた語を多義語という。このような語の多義性について、認知意味論では、カテゴリー拡張の結果生じたものと捉えるのが一般的である（Lakoff; 1987, Sweetser; 1990, Taylor; 1995）。カテゴリーとは、アリストテレスの時代の古典的カテゴリー観では、そのすべての構成員が構成員であるための必要十分条件を満たすと定義される集合であり、中心的構成員と周辺の構成員の区別はないと考えられていた。しかし、近年、古典的カテゴリー観は語の意味の分析には必ずしも適さないことが指摘されてきた。非古典的カテゴリー観では、カテゴリーの構成員の必要十分要件は、「+（プラス）」か「-（マイナス）」かの二元論に基づいて与えられるものではなく、構成員の間には中心的構成員と周辺の構成員の区別が存在するだけで、カテゴリー間には明確な境界線は存在しないと考える（Wittgenstein; 1978, Labov; 1973, Rosch; 1975, Lakoff; 1987）。

認知意味論では、多義語という一つのカテゴリーは、多くの場合、古典的カテゴリー観の要件を満たすものでなく、カテゴリーの中心にはプロトタイプの意味（基本義）が存在し、そこからメタファーやメトニミーなどの認知的原理（動機づけ）に応じて複数の方向へと意味拡張が展開していくものとする。このようなカテゴリーの最も一般的な形態が放射状カテゴリーと呼ばれるものであるが、放射状カテゴリーは、Lakoff (1987) で提示されたカテゴリー・モデルで、ある中心的（プロトタイプの）メンバーを取り囲むように2次的に周辺の（非プロトタイプの）メンバーが位置づけられ、その2次的なメンバーを中心にさらに3次的に周辺のメンバーが位置づけられるというように、結果として、幾重もの円が放射状に拡張していくカテゴリーをいう

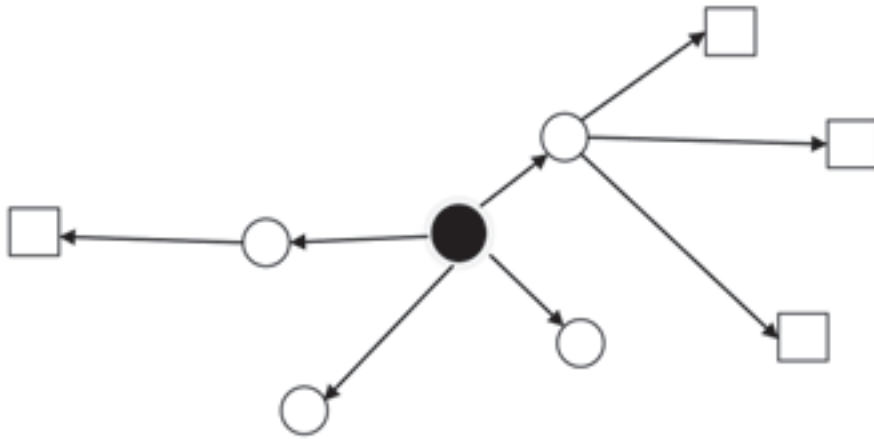


図1：放射状カテゴリーのイメージ（辻 2002:238）

（辻 2002:238）。放射状カテゴリーのイメージを示すと次のようになる：

上のイメージで、中心に位置する●は1次メンバー（プロトタイプ）を、○は2次メンバーを、□は3次メンバーを表している。すなわち、プロトタイプの●から○へ、さらに○から□へとカテゴリー拡張が展開している。

なお、認知意味論において、このようなカテゴリー拡張を引き起こす要因（動機づけ）として主要な役割を演じるのが「隠喩（メタファー）」「換喩（メトニミー）」「提喩（シネクドキ）」と呼ばれる3種類の比喩（レトリック）である。これらについて、佐藤（1992）、瀬戸（1997）、瀬戸（2007）、舩山・深田（2003）にしたがい、次のように定義する。

- （4） a. **メタファー**：二つの事物の間に存在する何らかの類似性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
 b. **メトニミー**：二つの事物の間に存在する何らかの近接性に基づいて、一方の事物を表す形式を用いて他方の事物を表す。
 c. **シネクドキ**：一般的な意味を持つ形式を用いて特殊な意味を表す、逆に、特殊な意味を持つ形式を用いて一般的な意味を表す。

3. 日本語「イエ」の多義構造

3.1. 「イエ」の複数の語義の認定

ここでは、「イエ」の意味拡張についてみていくが、はじめに「イエ」の複数の語義（意味）を

認定する作業から始める。その手がかりとして、次のような3つの国語辞典に挙げられている「イエ」の語義に関する記述を比較する。

広辞苑	大辞林	大辞泉
<p>1 居住用の建物。うち。(a) (普通は一家族の) 人が住むための建物。(b) 特に、自宅。わがや。</p> <p>2 同じ家に住む人々の集合体。(a) 家庭。家族全体によって形作られる集団。特に旧民法で、戸主の支配権で統率された、戸主と家族との共同体。(b) (「家のうちのあるじ」の意で) 妻。主婦。</p> <p>3 代々伝えて来た家、またはそう見立てられるもの。(a) 祖先から伝え継がれる血族集団。(b) 祖先から伝え来た名跡。家名・家業や芸術・武術の流儀など。家元。(c) 代々仕えてきた主君の家筋。おいえ。</p> <p>4 家の状態。(a) 家産。家の財政。(b) 名門。家柄。</p> <p>5 (出家に対し) 在家。俗生活。</p> <p>6 小さな道具類を入れる箱。茶道で、茶入れなどの茶器類の容器。</p>	<p>1 (a) 人が住むための建物。住居。家屋。(b) 自分のうち。我が家。自宅。(c) 生活の中心となる場所。家庭。所帯。</p> <p>2 (a) 夫婦・親子・兄弟などからなる生活共同体。社会を構成する最小単位。家族。(b) 民法旧規定において、一家として戸籍に登録された親族の団体。戸主とその統率を受ける家族から構成され、戸主は戸主権に基づいて家族の居所指定や身分行為の許諾などを行なった。現行民法の実施により廃止されたが、戸籍制度や社会慣習に現在もその影響が残る。家制度。</p> <p>3 祖先から子孫へと、血縁によってつながる家筋・家系。それによって守り伝えられた伝統・技芸・財産なども含めている。</p> <p>4 鏡・茶器などの器物を入れる容器。</p> <p>5 「家地」に同じ。</p> <p>6 立派な血統。名門。</p> <p>7 「妻」の婉曲な表現。</p> <p>8 (出家に対し) 在家。俗世間。</p>	<p>1 人の住むための建物。すまい。家屋。</p> <p>2 自分の住んでいる建物。うち。自宅。</p> <p>3 夫婦・親子・兄弟など血縁の近いものが生活を共にする小集団。家庭。所帯。</p> <p>4 祖先から代々続いてきた血族としてのまとまり。また、その伝統的な名誉や財産など。家名。家督。</p> <p>5 家族集団の置かれている社会的地位。家柄。特に、よい家柄。</p> <p>6 民法旧規定における家制度で、戸主の統轄のもとに、戸籍上一家をなしている親族の団体。</p> <p>7 妻。</p> <p>8 出家に対して、在家。在俗。</p>

以上、3つの国語辞典における「イエ」の意味に関する記述を参考にして、次のような①から⑦までの異なる語義 (<…>で囲んで示す) と概念 (コンセプト) ({…} で囲んで示す) を認定する²⁾：

①基本義<家屋>：{人が日常的に居住するための、特に、家族が日常的に居住するための建築物}

(5) a. 注文住宅・一戸建て・新築・建て替えのご相談などイエを建てるお手伝い。全国10,000社の地元工務店の2,500件を越える施工事例であなたにピッタリの工務店が探せます。

b. 「無印良品のイエ」は高い耐久性と機能的な設備を備え、一室空間による住まい手のほどよい距離感を演出します。家族構成や生活の志向に合わせ永く使える、変えられる、自

由に使える住みやすいイエです。

②転義<家庭>：{人が日常的に生活の拠点とする，特に，家族の日常生活の拠点となる場所}

- (6) a. 長期入院している患者さんの中に，全く帰るイエがない人がある。それどころか親戚も皆無である。
- b. 私たちは帰るイエを失いました。生まれ育ってきた故郷に二度と戻れなくなりました。避難場所を転々として地に足がつかません。

③転義<家族>：{同じ家に住み，日常的に生活を共にする，夫婦・親子・兄弟など，親族関係にある人々の集団}

- (7) a. みんながイライラして，喧嘩ばかりしていたと思っていたが，そのイエはとても温かく，みんなが寄り添い暮らしていた。
- b. うちのイエは《曾祖母，祖父，祖母，母，妹，弟》の7人です（曾祖母は祖母の母）。その95歳の曾祖母の介護で悩んでいます。曾祖母は現在ほとんど寝たきりです。

④転義<家制度>：{民法旧規定において，戸主の統轄のもと，親族（戸主と家族）から構成され，家族として戸籍登録された人々の集団}

- (8) a. 第二次世界大戦前の日本では，結婚はイエとイエとの結びつきであるとされ，家長の意向による結婚が多かった。
- b. 家族書と親族書は，かつて結婚がイエとイエとのつながりであった時代，親族の賛同を示すものとしての意味がありました。

⑤転義<家督>：{家制度で，祖先から子孫へと，代々引き継がれてきた，戸主が相続すべき戸主の地位・権利・義務，及び，その家族の財産・事業などの総体}

- (9) a. 現在，大学生をしているもので，長男です。イエが小売店，商売をしています。株式会社などではなく，個人商店です。長男はイエを継がなければならないのでしょうか。両親や家族には言っていないですが，私は，正直継ぐのに前向きになれません。
- b. まもなく30代に突入する女子です。年齢も年齢ですし，結婚ということも考える年ごろかなと思います。ただ私は田舎育ちの一人っ子で，実家は江戸時代から続くイエです。親戚には本家と言われています。今私にはお付き合いをしている男性がいますが，イエを

継いでくれる人でないと結婚は難しいと思うのです。

⑥転義<名家>：{代々続いてきた，長い伝統のある，社会的地位（身分や家柄）の高い家族}

(10) a. 旧家（きゅうけ）とは，公家の家格の1つ。天正年間以前に設立された家門を持つイエを指す。

b. 旧家とは，特定の地域において長く続いている家系を持つイエで，旧家と呼ばれる場合は，その地域や地方においてそれなりの社会的地位を古くから維持してきた由緒あるイエを指す。

⑦転義<家元>：{祖先から子孫へと，代々受け継がれ，守り伝えられた，芸能・芸道などの技をもつ家族}³⁾

(11) a. 私は藤田流という能の笛のイエに生まれました。四百数十年の間，家業として代々の人間が笛の奏法と道具（能管），唱歌（楽譜），伝書，古文書類を伝えてきました。私で11番目の継承者（家元）になります。

b. 能郷の能・狂言は，白山神社の祭礼に能郷村の猿楽衆のイエ16戸によって村内安全・家内安全・五穀豊穡を祈って奉納されてきた神事芸能である。祭礼は4月13日，年1回この日に限って上演される。猿楽衆のイエ16戸のイエは，能方，狂言方，囃子方とそれぞれイエが定まっており，世襲となっている。

上の①から⑦までの語義すべてに共通する必要十分条件はないと思われるが，各語義はそれぞれの使用例において自然に理解することができる。したがって，これらの語義と語義との間の関係は，認知的に自然な，何らかの動機付けに基づく意味拡張によるものであることが予測できる。

3.2. 「イエ」の放射状カテゴリー：意味のネットワーク

上で認定した①～⑦の語義は，次の図2のような放射状カテゴリーを構成すると仮定できる。なお，図2で破線矢印（…>）はメトニミーに，二重線矢印（⇒）はシネクドキに動機付けられた意味拡張を表す。

図2で示したように，「イエ」の基本義として仮定すべき語義は<家屋>であろうと思われる。基本義とは，多義語のさまざまな転義への意味拡張の起点となる，放射状カテゴリーの中心に位置する語義である。本論では，基本義を認定する基準として，初山（2002:107），初山・深田（2003:142），瀬戸（2007:4）にしたがい，次の3つを仮定する⁴⁾：

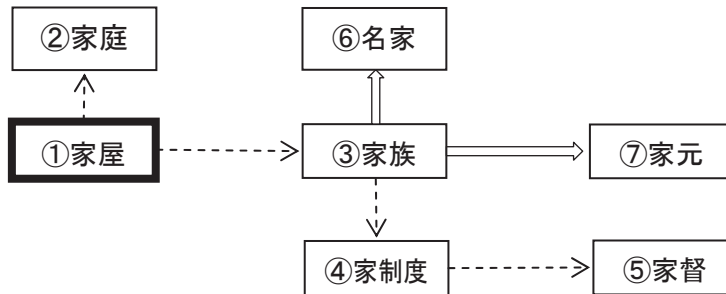


図2：日本語「イエ」の放射状カテゴリー

- (12) a. 多義語の複数の語義の中で、最も基本的な、意味拡張の起点となる語義。
b. 多義語の複数の語義の中で、最も想起されやすい（具体性または身体性の高い）語義。
c. 多義語の複数の語義の中で、意味拡張の結果派生した、様々な転義の理解の前提となる。

以上の基準を踏まえ、「イエ」の基本義を仮定し、さらにそれを起点として、図2のような意味拡張を仮定した。このような意味拡張を仮定すると、「イエ」の様々な語義が、相互に背反的な箇条書き的リストではなく、相互に関連性を保ちつつ、語義のネットワークを構成していることがうかがえる。日本語母語話者が「イエ」という多義名詞を容易に使用できるのは、このような放射状カテゴリーを通じて、「イエ」の多義構造を自然に理解できているからだと思われる⁵⁾。

3.3. 「イエ」の意味拡張の原理と動機付け

3.3.1. ①<家屋> → ②<家庭>：メトニミー的拡張

「イエ」とは、「人間が住むための建築物」であるが、「夫婦・親子などの関係にある者たち、すなわち、家族が半永久的に生活をともにする場所」という側面もある。このように「イエ」の「建築物＝モノ」としての側面ではなく、「家族の生活の拠点＝トコロ」という側面に焦点を置いた捉え方へのシフトは、近接性に基づくメトニミーによる意味拡張と考えられる。

3.3.2. ①<家屋> → ③<家族>：メトニミー的拡張

「イエ」とは、「人間が住むための建築物」であるが、「夫婦・親子などの関係にある者たち、すなわち、家族が半永久的に生活をともにする場所」という側面もある。このように「イエ」の「建築物＝モノ」としての側面ではなく、「家を生活の拠点としている集団＝ヒト」という側面に焦点を置いた捉え方へのシフトは、近接性に基づくメトニミーによる意味拡張と考えられる。

3.3.3. ③<家族> → ④<家制度> → ⑤<家督>：メトニミー的拡張

「イエ」とは、「一つの家に同居して、半永久的に生活の拠点としている集団」を指すことができる。このような「集団」すなわち「家族」に適用される「制度」への焦点のシフトは、近接性に基づくメトニミーによる意味拡張と考えられる。さらに、その「制度」において、主要な役割を担う「人」（及びその人がその制度で引き継ぐ「モノ」）への焦点のシフトも、近接性に基づくメトニミーによる意味拡張と考えられる。

3.3.4. ③<家族> → ⑥<名家>，⑦<家元>：シネクドキ的拡張

「イエ」とは、「一つの家に同居して、半永久的に生活の拠点としている集団」を指すことができる。しかし、このような「家族集団」には、さまざまなジャンルの「家族」が存在する。ある「家族」は「代々続いた結果社会的に重要とみなされるに至った家族」また、他の「家族」は「芸術など特殊な技能を代々引き継いできた家族」と捉えることができる。つまり、一般から特殊への焦点のシフトは、包含関係に基づくシネクドキによる意味拡張と考えられる。

4. 英語“house”の多義構造

4.1. “house”の複数の語義の認定

ここでは、“house”の意味拡張についてみていくが、はじめに“house”の複数の意味を認定する作業から始める。その手がかりとして、次のような3つの英和辞典に挙げられている“house”の語義に関する記述を比較する。

プロシード英和辞典	ラーナーズ プログレッシブ英和辞典	ルミナス英和辞典
1 家，家屋，住宅 2 家族，家庭；家系，血統 3（特殊な目的に用いる）建物； （大学・高校などの）寮；小屋 4 劇場；（集合的に）観客；興行 5 議院；（特に）下院；議事堂； （集合的に）議員 6 会社，商会	1 家，住宅，家屋，住宅 2 家庭，世帯；家族；（名門の） 家系，一族 3（特定の目的のための）建物 4 劇場；興行；（集合的）観客 5 議会；（特に）下院；議事堂； （集合的）議員 6 商社，商店，会社 7 飲み屋，宿屋 8（音楽）ハウス	1 家，家屋，住宅 2（特別な目的のための）建物 3 家の者，家族 4 議院；議事堂 5 劇場，演芸場；（劇場の）見物 人，聴衆；上演，興行 6（特に王族・貴族の）家系，一家 7 商社，会社；ロンドン証券取 引所 8（学校の）寮；寮生；（校内対 抗の）組，チーム；（大学の）学寮 9〔占星術〕宮（きゆう），…座 《天の12区分の一つ》 10《格式》討論者

以上，3つの英和辞典に挙げられている語義の記述を参考にして，“house”について，次のよう

な①から⑨までの9つの異なる語義を認定する⁶⁾：

①基本義<家屋>：{人が日常的に居住するための、特に、家族が日常的に居住するための建築物}

(13) a. My house is made of bricks.

(私の家はレンガ造りです)

b. John's house has six rooms.

(ジョンの家には6部屋あります)

②転義<家族>：{同じ家に住み、日常的に生活を共にする、夫婦・親子・兄弟など、親族関係にある人々の集団}⁷⁾

(14) a. The whole house was snoring in their sleep.

(そのうち全員が眠って鼾をかいていた)

b. In my house Mother holds the power. Poor Father has a fat lot of say.

(ぼくの家では母が権力を持っています。哀れな父は発言力がほとんどないのです)

③転義<名家>：{代々続いてきた、長い伝統のある、社会的地位（身分や家柄）の高い家族}

(15) a. The House of Habsburg was one of the most important royal houses of Europe.

(ハプスブルク家は、ヨーロッパの重要な貴族の家系の中の一つでした)

b. Many people still consider Edward VIII, the only English king to ever abdicate voluntarily, to have been the black sheep of the House of Windsor.

(多くの人が、自ら王位を捨てた唯一のイギリス王、エドワード8世はウィンザー家の面汚しだったと、いまだに考えています)

④転義（何らかの目的をもつ）<建物>：(通例複合語で) {何らかの目的または機能を有する建物、または、商業施設、宿泊施設、娯楽施設などの建物}

(16) a. court house

(法廷のある建物；裁判所)

b. hen house

(鶏小屋)

c. house of detention

（拘留のための建物；留置所）

⑤転義<ハウス>：{パブリックスクールなどで，学生や生徒が共同で居住して生活するコミュニティの場としての建物}

(17) a . He was a prefect and house captain.

（彼はハウスの監督生で生徒会長でした）

b . Which house are you in? I'm in Livingstone House.

（君はどこのハウスですか？リビングストン・ハウスです）

⑥転義<議院>：{その中で，政治的な協議，国勢の審議，または，立法などが行われる建物}

(18) a . The Japanese Diet is divided into the House of Representatives and the House of Councilors.

（日本の国会は衆議院と参議院に分かれている）

b . After ten years of struggling I had finally realized my dream of becoming a member of the Upper House. If only I hadn't accepted that little bribe.... Now I'm right back where I started from.

（苦節10年，やっと夢の上院議員になれたんだ。あのわずかばかりの賄賂を受け取りさえしなければ…。今や元の木阿弥だ）

⑦転義<会社>：{その中で，営利的な活動または商業的な活動を行う施設・組織が入った建物}

(19) a . We've been in solid with the Mexican trading house since our first transaction five years ago.

（あのメキシコの商社は5年前に初めて取引きをして以来，当社と良好な関係にあります）

b . We have already confirmed the interest of a large publishing house in a properly translated version.

（すでに，ある大手出版社から，適切な日本語版を出したい意向の確認も得ています）

⑧転義<劇場>：{その中で，演劇を見たり，演奏など聴くために人々が集まる建物}

(20) a . The Sydney Opera House is one of the most beautiful structures in the world.

(シドニーのオペラハウスは世界で最も美しい建造物の一つです)

- b. If my memory is correct, the painting on the ceiling of the Paris Opera House is by Chagall.

(わたしの記憶が正しければ、パリのオペラ座の天井の絵はシャガールの作です)

⑨転義(劇場の)＜観客＞：{劇場, 映画館, または音楽堂などに集まった人々}

- (21) a. A hundred musicians performed in front of a full house.

(百人の音楽家が満場の観客の前で演奏しました)

- b. The show has been playing to packed houses since it opened.

(そのショーは開演以来満員の観客に演じられてきました)

上の①から⑨までの語義すべてに共通する必要十分条件はないと思われるが、これらの“house”の各語義は、それぞれの使用例において自然に理解することができる。したがって、これらの語義の間の関係は、認知的に自然な、何らかの動機付けに基づく意味拡張によるものではないかということが予測できる。

4.2. “house”の放射状カテゴリー

上で認定した①～⑨の語義は、次の図3のような放射状カテゴリーを構成すると仮定できる。なお、図3で実線矢印(→)はメタファーに、破線矢印(⋯→)はメトニミーに、二重線矢印(⇒)はシネクドキに動機付けられた意味拡張を表す。

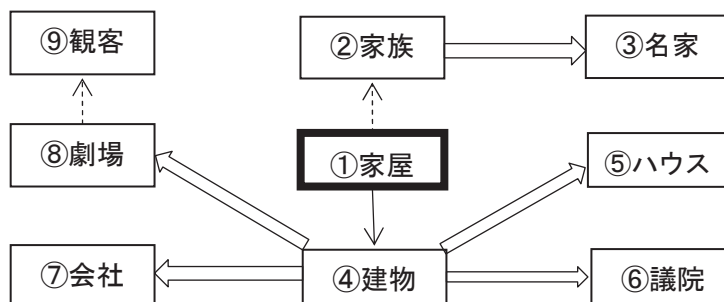


図3：英語“house”の放射状カテゴリー

図3で示したように、“house”の基本義として仮定すべき語義は＜家屋＞であろうと思われる。「イエ」の分析と同じ基準により、“house”の基本義⁸⁾を仮定し、さらにそれを起点として、図3

のような意味拡張を仮定した。このような意味拡張を仮定すると，“house”の様々な語義が，相互に背反的な箇条書き的リストではなく，相互に関連性を保ちつつ，語義のネットワークを構成していることがうかがえる。英語母語話者が“house”という多義名詞を容易に使用できるのは，このような放射状カテゴリーを通じて，“house”の多義構造を自然に理解できているからだと思われる。

4.3. “house”の意味拡張の原理と動機付け

4.3.1. ①<家屋> → ②<家族> → ③<名家>：メトニミーとシネクドキ的拡張

“house”とは，「人間が住むための建築物」であるが，「夫婦・親子などの関係にある者たち，すなわち，家族が半永久的に生活をともにする場所」という側面もある。このように“house”の「建築物＝モノ」としての側面ではなく，「家を生活の拠点としている集団＝ヒト」という側面に焦点を置いた捉え方へのシフトは，近接性に基づくメトニミーによる意味拡張と考えられる。次に，このような「家族集団」には，さまざまなジャンルの「家族」が存在する。「代々続いた結果，社会的に重要とみなされるに至った家族」と捉えること，つまり，一般から特殊への焦点のシフトは，包含関係に基づくシネクドキによる意味拡張と考えられる。

4.3.2. ①<家屋> → ④<建物> → ⑤<ハウス>，⑥<議院>，⑦<会社>，⑧<劇場>：

メタファーとシネクドキ的拡張

“house”とは，「人間が住むための建築物」であるが，「人間が住むため」という特定の目的以外にも様々な目的，すなわち「人間が何かをするため」に，“house”になぞらえて建てられた建築物もある。ここでは，機能と外見の類似に基づくメタファーによる意味拡張がみられる。さらに，「人間が何かをするため」に，“house”になぞらえて建てられた建築物は，「生徒が寄宿する」「議員が審議する」「社員が働く」「観劇をする」などの特殊な目的で使用されることもある。ここでは，一般から特殊へのシフト，つまり，包含関係に基づくシネクドキによる意味拡張がみられる。

4.3.3. ⑧<劇場> → ⑨<観客>：メトニミー的拡張

観劇をするために建てられた“house”には，その目的のために集まってくる人々が中に入場して，着席する。この場合，“house”の建築物（モノ）としての側面ではなく，その内容物（ヒト）に焦点を置いた捉え方へのシフトは，近接性に基づくメトニミーによる意味拡張と考えられる。

5. おわりに

本論では，日本語の多義語「イエ」と英語の多義語“house”を取り上げ，認知意味論の観点から考察した。その結果確認できたことは，「イエ」と“house”は多義語であり，それぞれ放射状カ

テゴリーを形成するということである。最後に、対照言語学的な立場から、「イエ」と “house” の多義構造における類似点と相違点をまとめると次のようになる：

- (22) a. 「イエ」と “house” の基本義として、建築物としての側面に焦点を置いた＜家屋＞を仮定するのが妥当である。
- b. 「イエ」と “house” の転義の方向性としては、＜家族＞の方向へ向かう点が共通している。
- c. 「イエ」の転義の特徴としては、家父長制度という文化的背景を反映していると推測される＜家制度＞＜家督＞＜家元＞のような、“house” にはないものが見られる。
- d. “house” の転義の特徴としては、居住以外に人間がさまざまな目的で使用する建築物という、カテゴリー拡張的な＜会社＞＜議院＞＜劇場＞＜ハウス＞のような、「イエ」にはないものが見られる。
- e. 意味拡張の動機付けとしては、「イエ」と “house” の両者ともに、メトニミーとシネクドキによるものが多い。

注

- 1) 多義語の認知意味論的分析の手法については、初山（2002）、初山・深田（2003）等を参照。
- 2) 「イエ」の語義のうち、＜在家＞：「出家しないで在宅で俗生活を営むこと」、＜主婦＞：「普段家にいて家庭内の仕事を担当する女性」、＜茶器類容器＞：「茶道で使う茶器、または、小さな道具類を入れる箱」、＜家地＞：「甲冑の裏に下地として張りつける金襴緞子などをういた布」の4つは、廃れているか、または、一般的ではないと思われるので分析の対象から除外した。
- 3) 次のような例における「イエ」は「祖先から子孫へと、代々受け継がれ、守り伝えられた、技術・家業などをもつ家族」というコンセプトを表しており＜家元＞のそれと類似している：
 - (i) 私が生まれたイエは、大正時代、昭和の初期あたりに、造り酒屋で栄えたイエでした。
 - (ii) 三村正利は文化元（1804）年に、川俣村（現在の羽生市）に生まれました。正利は幼名を亀松といい、古くから宮大工を営むイエの7代目として生まれました。
 しかし、このコンセプトに張り付ける適当なラベル（語義）がないので（少なくとも、＜家元＞では不適切と思われる）、今回この意味における「イエ」は分析の対象から除外する。
- 4) 基本義認定のその他の条件として、(i) 用法上の制約を受けにくい、(ii) 言語習得の早い段階で獲得される、(iii) 使用頻度が高いことが多い、なども付け加えることもできる。
- 5) 査読者から＜家庭＞と＜家族＞の語義の間の直接的関係の有無についてご指摘があった。本論では、両語義は基本義＜家屋＞を仲立ちとして、間接的に関係していると考え。＜家庭＞については、＜家屋＞の「生活の場」としての側面に、＜家族＞については、「その場所で生活する人々」に焦点が当てられた結果生じてきた転義であると考え。また、＜家督＞＜名家＞＜家元＞の3語義について、「代々続く」という共通の含意がある旨ご指摘があった。認知意味論では、語義と語義は、必ずしも明確に切り離された別個のものではなく、連続性を有したものと捉えるので、複数の語義間に意味成分の重複が見られることもありえる。
- 6) ＜議員＞＜修道院＞＜ハウス系ミュージック＞の3つの語義については、辞典に挙げられてはいるが、実際の使用例が少なく、あるいは意味的に特殊という理由で分析の対象から除外する。

- 7) 査読者から、英語の“house”には、日本語の「イエ」に見られる＜家庭＞という語義はないのかという指摘があった。本論の分析では、英語の“house”にはこの語義は認定されなかったが、むしろこの語義については、英語の“home”が担っているのではないかということが予測される。
- 8) “house”の基本義の仮定に際しては、初山 (ibid. 107), 初山・深田 (ibid. 142), 瀬戸 (ibid. 4) の基準以外に、*Oxford Dictionary of English* における“house”の見出しの第一番目に挙げてある“a building for human habitation, especially one that consists of a ground floor and one or more upper storeys”という記述も参照した。同辞典は、最も基本的な意味 (core sense/core meaning) を第一番目に挙げることを編集方針として掲げているからである。

参考文献

- Labov, W. (1973) “The Boundaries of Words and Their Meanings,” In: C.J.N. Bailey and R.W. Shuy (eds.) *New Ways of Analyzing Variation in English*. Washington: Georgetown University Press. 340-73.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Rosch, E. (1975) “Cognitive Representations of Semantic Categories,” *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』(シリーズ・日本語のしくみを探る⑤) 東京：研究社.
- 初山洋介・深田智 (2003) 「意味の拡張」松本曜 (編) 『認知意味論』(シリーズ認知言語学入門第3巻) 東京：大修館書店, 73-134.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』講談社学術文庫.
- 瀬戸賢一 (1997) 「第Ⅱ部 意味のレトリック」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化発想とレトリック』(日英語比較選書①) 94-177. 東京：研究社.
- 瀬戸賢一 (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館.
- Sweetser, E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Taylor, J. R. (1995) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory* (2nde.). Oxford: Clarendon Press.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学 キーワード辞典』東京：研究社.
- Wittgenstein, L. (1978) *Philosophical Investigations* (trans. G.E.M. Anscombe). Oxford: Basil Blackwell.

参考国語辞典

- 『大辞林』(三省堂, 第3版)
- 『大辞泉』(小学館, 初版)
- 『広辞苑』(岩波書店, 第5版)
- 『明鏡国語辞典』(大修館書店, 初版)
- 『新選国語辞典』(小学館, 第16版)

参考英和辞典

- ラーナーズ プログレッシブ英和辞典 (小学館, 第2版)
- ルミナス英和辞典 (研究社, ウェブ版)

ブロシード英和辞典（福武書店，改訂版）

参考英英辞典

Cambridge Dictionary of American English（第2版）

Longman Dictionary of Contemporary English（第3版）

MacMillan English Dictionary for Advanced Learners（新版）

Merriam-Webster's Dictionary（ウェブ版）

Oxford Dictionary of English（第3版）